アーティストインタビュー
八巻寿文さん

—最初に自己紹介いただいてよろしいですか？

八巻：八巻寿文で、ぶ、点々、濁音のぶみです。昭和 31 年 5 月 9 日生まれです。仙台、この榴岡で生まれました。高校出て、美大、絵が上手だったんですけども。高校の時ね、ある事件を起こしちゃった、やらかしたんですけど。巻き込まれたことがあって。非常に命に関わる恐怖体験をして、それで精神病になりました。それは狭心症状の恐怖っていう、神経症じゃなくて、精神病なの、病名のある。キチガイですよね、になって、世界観がガラッと変わって。それで、もう描く絵も表現も、もう見るものも感じ方も、ある瞬間からガラッと変わったみたいななっちゃって、今の自分がいるんですけども。で、高校出てフランスに留学して。これ、あんまり長くなんないほういいよね？　で、帰ってきて。フランスに、なんていうか、大学に行く代わりに行かせてもらってたので、自力で行き直す。いようと思えばいつまでもいられるなと思って怖くなって、1 回帰って、自力でもう 1 回、来なおそうっていうかね、思ったんだけども。じゃあ何やって働くか、収入得るからっていうと、表現をして、色を使って表現をしてカネになるっていったら舞台照明かなと思って。それで、帝国劇場にハッタリで飛び込んで、それから生業として舞台照明ずっとやってます。

実は、強度の色盲で。色に関してものすごいコンプレックスがあったんだと思いますけども。色を使って俺は生きていきたいんだ。つまり、芸大に、芸大は色盲は入学できなかったんです。芸大の中に資料室があって、学生証がないと行けないんだけども。努力すれば入学できる可能性は 0.1%、みんなあるわけじゃないですか。僕の場合遺伝だから、100%ないんですよ。入学できないんですよ。だから、資料室に火をつけに行こうかなと思って、思いとどまって留学したっていう感じです。だから、帰ってきても、色を使って社会の中に自分が存在したい、働きたいと思ったこだわりがすごくありすぎて、溢れていって、舞台照明の世界に入ったんですよね。

帝劇で、日本の舞台照明を作った大庭三郎っていう人がいるんですけども。その人が、２年目かな、呼ばれて、「八巻くん、君の色はちょっと変わっているけども」って話されて、「どうしてあのシーンであの色なの？」とか聞かれて、も

うこれはもうバレたって思ってね、その時もう大泣きしました。ううって。そういうので、ずっと色の、カラーフィルターの管理は誰にも手触らせないで、自分で、独自の番号で管理して。で、僕がプランナーやる時は、あの芝居のあの人のあの夕焼けとか、この芝居のこの人の色の使い方とかっていうのは、全部インプットされていて。で、新しい台本来た時に、あ、あの時のあのシーンのあの色を使おうみたいな感じ。色見えてないから。そういう感じなんですよ。ずっと神経張り詰めて、ばれないように、しかも自分が満足できる表現をしよう、色を使ってね。やって、僕の世界の色でしか見えてないから。それを普通の人って呼ばれる人の色の世界とすり合わせないと、僕がこの世に存在している確信が持てないからね。

　でもそれがバレちゃったっていうのが、なんかすごい解放された感じで、うれしかったんですよ。なんていうか、もうこれで裸になれるっていうか、楽になれるって思って。泣いてしま、もう号泣してしまいました。先生の前で。ただね、大庭三郎が、照明はチームワークだから、1人色盲のやつがいるってもし思ったら、このきっかけで、あいつはあの色を出すかどうか分からないって一瞬でも不安に思うと、きっかけがコンマ何秒か遅れるって言うんですよ。だから照明の仕事辞めないか。その代わり、音響でも美術でも大道具でも、入れてやるから紹介するからって言われて。じゃあ辞めますって辞めたんですよ。そのあともしつこく、フリーでやってました。だから、今、結構有名で、大手の舞台照明の会社を、作ろうよ、みんなで会社、新しく作ろうよみたいな、なんか熱気があるような時代だったから。そういう時代に、僕もフリーで、結構仕事して。フランスから来た俳優とかは、フランス語が理解できる照明家なんていませんからね。フランスから来た外タレは、だいたい僕、マルセル・マルソーの日本初演とか随分やってます。休憩時間、フランス人と一緒にお昼、ランチ食べて、昼からワイン飲んで現場に入るみたいな（笑）。こともあった。でもね、厳しくてね、厳しくてっていうか、やっぱりフリーで自分がつま先立って現場に入ってる状態で、相当負荷がかかってたんだと思うけども、ある日消えるように現場を捨てましたね。もう抱えきれなくなったっていうか。本当、逃げた。それからは、僕、自分は美術家っていうね、自覚があるので、ずっと作品作っていました。

—仙台の演劇に関わるようになって、観始めるようになって、本当に生き字引だと思うんですけれども、それからの関わり方とか、恐らく裕人さんとかそういう

お話とかもあると思いますし、若手の人たちのお話もあると思うんですが。なんかそういうところで、思い出深い話とか。

八巻：その頃、独立して劇団として、技術講座なんか別に必要としないで活動していた劇団は、十月と I.Q と六面座ですね。それより古い劇団っていうのは、麦とかありますけども、でも本当数えるくらいですよね。それ以外は、技術講座から以降、技術講座が作ったとは言わないよ、技術講座があって、それ以降できた劇団たちなんです、みんな。一部、その背中を押したっていうことが、役割は担ったと思うけども、技術講座がね。でもそれだけじゃないですよね。みんなのモチベーションと努力で、劇団がぽこぽこ生まれて、活動が始まって。解体してはまた別の劇団ができて。どんどんどんどん増えていってっていう感じです。三角フラスコなんかは、エル・パークの何年後かの劇団で、それより前に、もういくつも劇団生まれてますからね。今もう既にない劇団。

—十月劇場とかの関わりっていうのは？

八巻：十月は僕は。あのね、僕が仙台に戻ってきて、エル・パークのできる前だね。仙台に戻ってきた時に、十月劇場にいる役者が、僕、子供の頃から一緒に遊んでたやつが 1 人役者でいたんだよね。で、僕が東京で舞台照明やっている、僕が仙台に帰って来たっていうことで、たぶん十月に入れたかったんだよね。紹介したい人がいるからっていって、何人かと会って、何人かといろいろしゃべってたんだけど。僕は全然演劇をやるとかって、その頃もう既に自分が照明家であることすら忘れているから、なんか話をしたぐらいの記憶しかなくて、それで分かれたんだけど。たぶんそれが、石川裕人と西塔亜利夫なんですよ。で、僕の友達なんだけども、彼は十月劇場の途中でいなくなったのかな。そこに石井忍もいたかもしれないです。3、4 人いたんですけどね。チサンホテルのラウンジでお話した記憶はあります。名前覚えてないけども、たぶんそうです。

　だからあれです、定禅寺通りにスタジオがあって、そこで本番やってたのを僕は観に行ってました。芝居、演劇もう好きで観ないと、観たくてしょうがないという感じではないんだけども、友達がいるっていうこともあって、十月のお芝居は観ましたね。かなり初期の、洪洋社の『ジェルソミーナ』とか観ました。で、あの時に、東京でも帝劇辞めてフリーランスになってから、結構、今思えば、大

野一雄さんもそうだけども、小劇場だとか舞踏の現場もやってたんだよね。よく覚えてないんです。足元こなしてたっていうだけで。でも、なんかこう、すごいなとか思いながらやってたんだけども、十月の芝居観た時に、全然遜色ない。あれ、ここ、東京じゃないのかなって思う感じで。仙台にもこういう芝居やる連中がいて良かったなと思ったし。東京で観てた芝居は、世界、フランスで観たものよりもよっぽど刺激的だし進んでいるから。ただ、芝居って日本語だしね。外国でなかなか、この日本人にしか共有できないニュアンスのこの空間って、輸出できないんだろうなって思ったけども、クオリティは世界レベルだと思ってたし、どこにでも持ってっても評価されるなって。でも輸出できないのは、悲しいかな、それが演劇だって思ってたから。

　その東京の演劇と全然遜色ないものが仙台にもある。それでなんか、うれしかったっていうよりも安心したっていうか。僕も関わって、僕自身作家としてそういう意識で作品を作っているから。そのレベルが仙台にもあって安心したっていう感じですね。

大河原：じゃあ最後になるんですけど。皆さんには、あなたにとって演劇は何かっていう最後の質問をするんですね。ここまでお話を聞いた方に。なぜ続けているのかっていう。ただ、八巻さんに伺いたいのは、なんのために、これまで、今のような道を歩んでこられましたか？　ちょっと言い方が、あれなのかな。なんて言ったらいいんだろう。おそらくは、人生のその全てが作品だと思ってるんですね。八巻さん。

八巻：うん、そうですね。

大河原：その作品は、誰に捧げるんですか？

八巻：これは自己。僕の中のパンドラの箱っていうのは、なくならないんですよ。なくならないんだけども、癒すことはできるの。時々扉が開いちゃったりするんだけど、見た目では分からないと思います。そういう自分の、パンドラの箱を抱えている自分が、ここに存在してるってことを認識することとか、自分の存在を認識するためかな。なんかすごい自己中的なあれだけど。もうそんな、もっとはかないんだけど。

大河原：なんかなんだろう、そこに出てくる言葉が、なんだろうな。自己中的には思わなかったんですけどね、今。

八巻：1回だからすごい僕、世界と乖離してしまっているんですよ。本当はすごいPTSDで、病名を持っているからね。で、それがなくなんないないわけ。それはね、すごく上手に抱えることもできてます。かなりコントロールもできる。でもなくなるわけじゃないの。それって、なんていうか、社会だけじゃない、世界がね、目に見える世界に対する疑いは消えないんです、僕の中で。でも、それを疑わないでいられる瞬間。つまり、自分以外の人間の存在と共にいられる瞬間っていうのはやっぱり、僕が生きていく上で必要なんだね、きっとね。

大河原：興味深い話を、たくさん根掘り葉掘り聞いてしまい。時間が。ありがとうございました。